

滋賀文化めざまし

NO. 204

1994. 12. 20

●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

226. 鬼室集斯墓碑について

1.はじめに

国際交流華やかりし昨今、日野町も他間にもれず昭和60年にブラジル国エンブー市と、平成2年に大韓民国恩山面とそれぞれ姉妹都市提携を結んでいる。特に、後者の場合は百済からの渡来人である鬼室集斯が取り持つ縁によるもので、日野町大字小野の鬼室神社には鬼室集斯の墓碑があり、恩山面には鬼室集斯の父親と言われている鬼室福信を祭神とする恩山別神堂がある。恩山面とは姉妹都市提携調印以前から現在に至るまで、数次にわたる使節団を相互に派遣し、両国の交流を深めている。このように恩山面との国際交流を進めている日野町にとって、鬼室集斯の墓碑は欠かすことのできない存在となっている。

この鬼室集斯の墓碑については発見当初から真偽論争が展開されるが^①、『近江日野町志』に代表されるように研究者の間では贋作説が優位を占めていた^②。しかし、恩山面との国際交流の盛り上がりと前後して、近年になってこの論争が再燃し^③、再びこの墓碑が注目されることとなった。

筆者としてはあえてこの論争に加わるつもりはないが、姉妹都市提携の発端となった墓碑であるにもかかわらず、日野町にはそれについての公的な基礎資料が

全くなく、このままでは今後の交流に支障を来たすかもしれないと考えられた。そこで、町内に所在する文化財の1つとして、実態を把握する目的で平成6年度に実施した調査の成果を過去の研究をふまえた上で、この紙面を借りて報告するものである。

2. 大字小野と鬼室神社

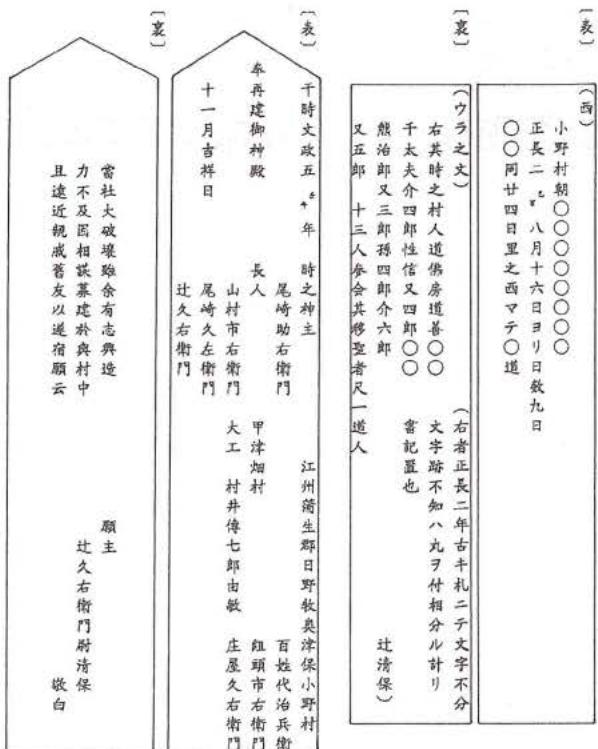
大字小野は日野町の中央部北東よりに位置し、鈴鹿山系より北西方向に派生する300m前後の丘陵地帯に立地する。30戸余りから成る集落は、竜王山を水源とする佐久良川の支流である前川が形成した右岸段丘上にある。古くは西明寺村に属していたが、その後に分村して小野村となつたとされている。江戸時代は旗本領、幕府領、大名領と領主が頻繁に替わり、寛永年間（1624～44）の石高は322石余となっている^④。明治22年に桜谷村に、同27年に東桜谷村に編入され、昭和30年の町村合併以来、現在に至っている^⑤。集落内には、釈迦如来を本尊とする曹洞宗西法寺と、後述する鬼室神社の他に、寛弘元年（1004）創建と伝えられる天神社の1寺2社がある。

鬼室神社は元来不動明王を祭る不動堂であったが、明治時代に西宮神社となり、さらに昭和30年11月に祭神を鬼室集斯とする鬼室神社に改名された。現在は瓦葺き2間半四方の社殿であるが、かつては草葺きで2間四方ないし2間×1間半であったようである^⑥。なお、当社の棟札として次の2点が伝えられている^⑦。



第1図 位置図

右側は正長2年(1429)の棟札の写で、()内の文字が注釈として加筆されている。文政5年(1822)の



再建時(左側)の願主と同じ「辻清保」の名が見えることから、この時に古い棟札を書き写したものであろうと考えられる。また、前者の棟札の記述に関連するものとして、弘化年間(1844~48)に京都所司代邸へ差し出された調書に、「一西宮 祭神小錦下学頭職鬼室集斯(百濟人)後に正長二年八月二十四日尺一道人(名仍栄俗称菅原唐橋在豊郷叔父)不動明王を本地仏としたる故今は不動なり」とある^⑩。この他の在銘資料としては、「元禄四辛未年五月吉日」や「明治四十一年七月」の石造灯籠等がある。なお、鬼室集斯の命日とされている11月8日に例祭が現在も行われている。

3. 鬼室集斯と墓碑

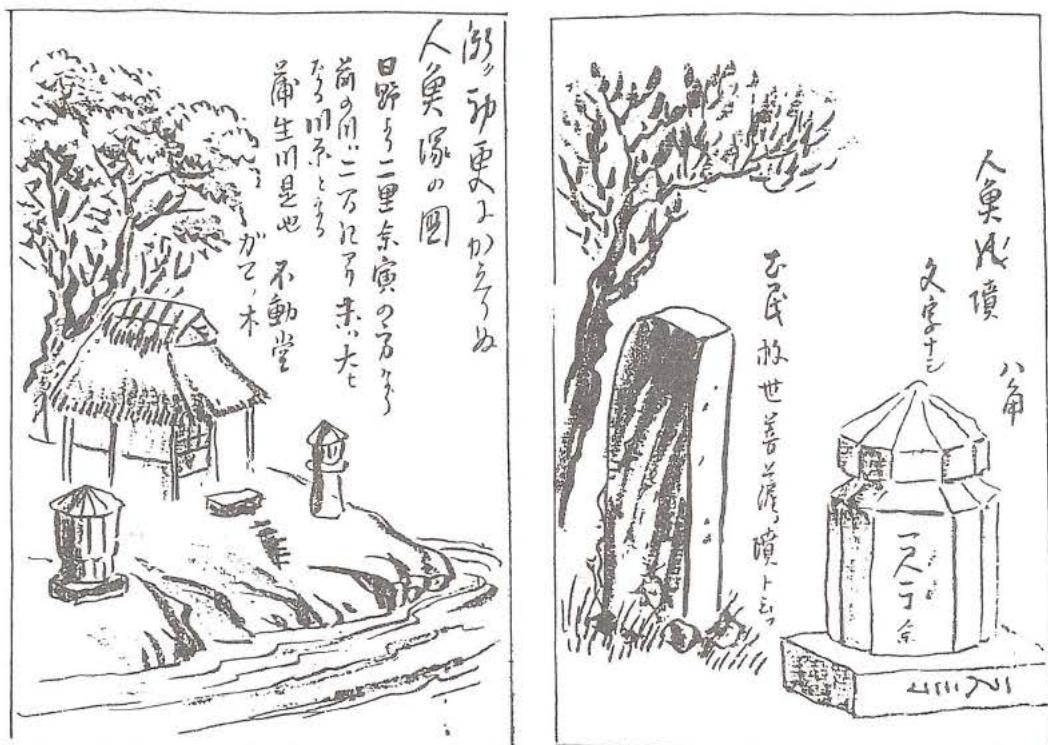
鬼室集斯は百濟滅亡(660年)後、日本へ渡來した百濟人の1人であり、『日本書紀』にその名がみられる部分を以下に抜粋する^⑪。

・天智四年二月是月条

「佐平福信の功を以て、鬼室集斯に小錦下を授く。其の本の位は達率なり。復、百濟の百姓男女四百餘人を以て、近江國の神前郡に居く。」

・天智八年是歲条

「佐平餘自信・佐平鬼室集斯等、男女七百餘人を以て、近江國の蒲生郡に遷し居く。」



第2図 「江漢西遊日記」のスケッチ

・天智十年正月是月条

「小錦下を以て、鬼室集斯 學職頭ぞ。に授く。」

これらの記述から、鬼室集斯は百済復興活動の中心となった鬼室福信の親族（子か）とみられ、神崎・蒲生両郡に遷住させられた百済移民の統括者の存在であったと考えられている^⑩。また、学職頭は現在でいう文部大臣的な役職で、天智天皇の有能な側近の1人であったことがわかる。ちなみに、佐平は百済の16ある官位の第1位で、5人だけに与えられたものである。これに対して、小錦下は天智3年（664）に制定された冠位二十六階制の第13位である。

墓碑が発見されたのは文化2年（1805）のこと、仁正寺藩の典医であった西生懷忠等の調査によるものである。その発見の経緯やその後の真偽論争については、従来からの諸研究に詳しく述べられているのでここでは省略するが、それらの文献によると、墓碑は現在のように石の祠に以前から納められていたのではなく、板石の上に直接建てられ風雨にさらされていたようである。そして、人々はこれを「救世菩薩の墳」と言い、「人魚塚（墳又は墓ともある）」と呼んでいたようである^⑪。また、文龜元年（1501）の元図を写したとされる『興福寺領近江國蒲生郡長寸郷奥津野保左久良十七郷摺繪圖』には、「大内藏人時頼墓」と記されている^⑫。

4. 調査の結果

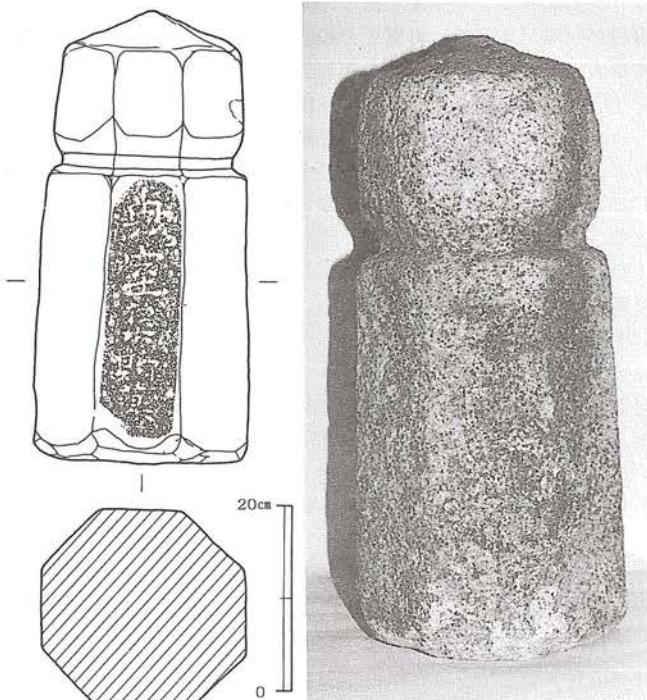
今回の調査は鬼室集斯墓碑の基礎資料の収集を目的としたものであり、写真撮影、実測、拓本、石材鑑定を行った。

規模及び形状は次のとおりである。高さが48.8cmのほぼ八角柱状を呈し、頂部から4.4cm下方の所まで鈍く尖らせてある。底部の幅が20.8cmであるのに対し、頂部は18.8cmとなっていることから、底部から頂部に向かってわずかながら細くなっていることがわかる。底部はほぼ平坦で、柄穴等の特別な細工は認められない。なお、頂部から下方13.3cmの位置には、4.4cmにわたるクビレがあり、最もクビレの大きい所での幅は18.0cmを測る。頂部から29.0cm下方位置での水平断面は、一辺8.0~9.2cmのほぼ正八角形となっている。

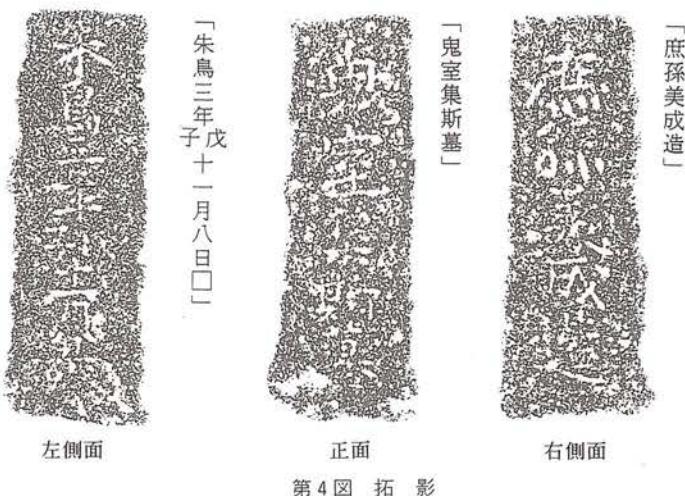
銘文は8面の内1面おきの計3面に1行ずつ合計22文字が陰刻されている。銘文の詳細は第4図のとおりである。

なお、左側面の末尾文字は旁部分が欠損しているため確定されていないが、従来からの研究によると「殞」・「歿」・「殂」等と判読されている^⑬。なお、朱鳥という年号は元年のみで、その翌年は持統元年となり、朱鳥3年は通常存在しないことになる。ただし、干支をみると、朱鳥元年は丙戌で、持統元年は丁亥、持統2年は戊子となり、朱鳥元年を基準とすると朱鳥3年が戊子となり干支のうえでは一応矛盾してはいない。

材質は従来の報告では流紋岩質凝灰岩とされていたが^⑭、この度、元大津市立科学博物館勤務の宇野光一氏



第3図 実測図及び写真



第4図 拓影

(岩石学)の鑑定により、大字小野に所在する石小山産の黒雲母花崗岩であることが判明した。石小山は前川左岸に所在する標高340m余りの低い山で、北側中腹には通称「石切場」と呼ばれる所があり^⑩、かつては花崗岩の産出地で、現在でも採掘跡や石屑等が見られる^⑪。また『近江輿地志略』にも「土民石を取って業とす」とあるように^⑫、古来から石材が切り出されていたようである。

5. おわりに

今回の調査により懸案であった鬼室集斯墓碑の基礎資料が収集でき、特に材質とその産地が確定できたことは大いなる成果であった。そして、墓碑に加工された花崗岩が地元の石小山より切り出されたものであるということは、石小山における花崗岩採掘の歴史を溯れば、おのずと墓碑の作成年代の上限が決定できるのではないかと考えられる。あらゆる輸送手段が確立されている現在ならいざ知らず、水運や人馬による輸送手段しかもたなかつた近世以前においては、石材の交易範囲は産出地を中心とした限定されたものでははずであり、ましてや花崗岩という普遍的な石材であればなおさらのことであろう。ちなみに近江八幡市岩倉も花崗岩の産出地として有名であり、このことから考えても石小山の花崗岩の流通範囲はやはり日野町を中心とする地域と考えるのが妥当であろう。幸いにも、日野町は石製の建造物や工芸品の宝庫であり、これを丹念に調査していくけば、石小山石切場の起源を知ることができるのでないだろうか。

鬼室集斯墓碑の製作年代や真偽のほどはさておき、いずれにしても、日野町大字小野の鬼室神社にこの墓碑が現存するということは否定できない事実である。そして、大字小野の辻家の『過去帳』には下記の記述があることから^⑬、大字小野には鬼室集斯の子孫が代々住み着いてきたということになる。仮に百歩譲って、墓碑やこの記述が作為的に捏造されたものだとしても鬼室集斯と大字小野を結び付ける何かがあつたからだと考えるべきである。それが単なる伝承であろうともよいわけで、鬼室集斯を祭神とした鬼室神社が日野町大字小野にあるという事実だけで十分である。この事実によって大韓民国恩山面と国際交流が成立したのであり、墓碑の真偽

にかかわらず今後も両国のさらなる親交を深めてゆくべきであると考える。

最後に、今回の調査にあたり、遠方にもかかわらず現地まで出向いていただいた宇野光一、西田弘の両氏、また、何かと便宜を図っていたいた地元の増田喜一郎氏、植田慶一氏夫妻、全般にわたって指導と助言をいただいた滋賀県文化財保護協会調査整理課長兼康保明氏に、感謝の意を表したい。（日永 伊久男）

註

①坂本林平『楓亭雜話』

胡口靖夫「鬼室集斯墓碑をめぐって」（『日本書紀研究 第11冊』 1979）

②「西生懷忠」『近江日野町志 卷下』日野町教育会 1930

③前掲註①胡口 1979

胡口靖夫「古代における近江国蒲生郡の水田開発—鬼室集斯墓の所在地をめぐって—」（『歴史読本 25巻5号』 1980）

『八日市市史 第1巻 古代』八日市市史編さん委員会 1983

『東桜谷志』東桜谷公民館 1984

瀬川欣一「日野町小野の鬼室集斯の墓は史実でない」（『滋賀県地方史研究紀要 第11号』 1985）

『五個荘町史 第1巻 古代・中世』五個荘町史編さん委員会 1992

胡口靖夫「鬼室集斯墓碑をめぐって」（日野町民会館「わたむきホール虹」オープニング記念行事『日韓文化シンポジウム 古代近江と朝鮮文化』講演資料 1993）

④『日本歴史地名大系第25巻 滋賀県の地名』平凡社 1991

⑤『滋賀県市町村沿革史 第3巻』弘文堂書店 1988

⑥司馬江漢『江漢西遊日記』及び前掲註③胡口 1993

⑦遠藤宗義『鬼室集斯墳墓考』 1903

⑧前掲註①胡口 1979

⑨『日本古典文学大系 日本書紀下』岩波書店 1968

⑩前掲註④

⑪前掲註③胡口 1993

⑫前掲註③『東桜谷志』

⑬前掲註①胡口 1979

⑭前掲註①胡口 1979

⑮前掲註③『東桜谷志』付図「東桜谷図 <その1>」

⑯『日野町内遺跡詳細分布調査報告書 昭和63年度版』

日野町教育委員会 1989

⑰『新註 近江輿地志略』弘文堂書店 1976

⑱前掲註①胡口 1979